

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書 第27集

市内遺跡発掘調査報告書(15)

堀切遺跡の調査

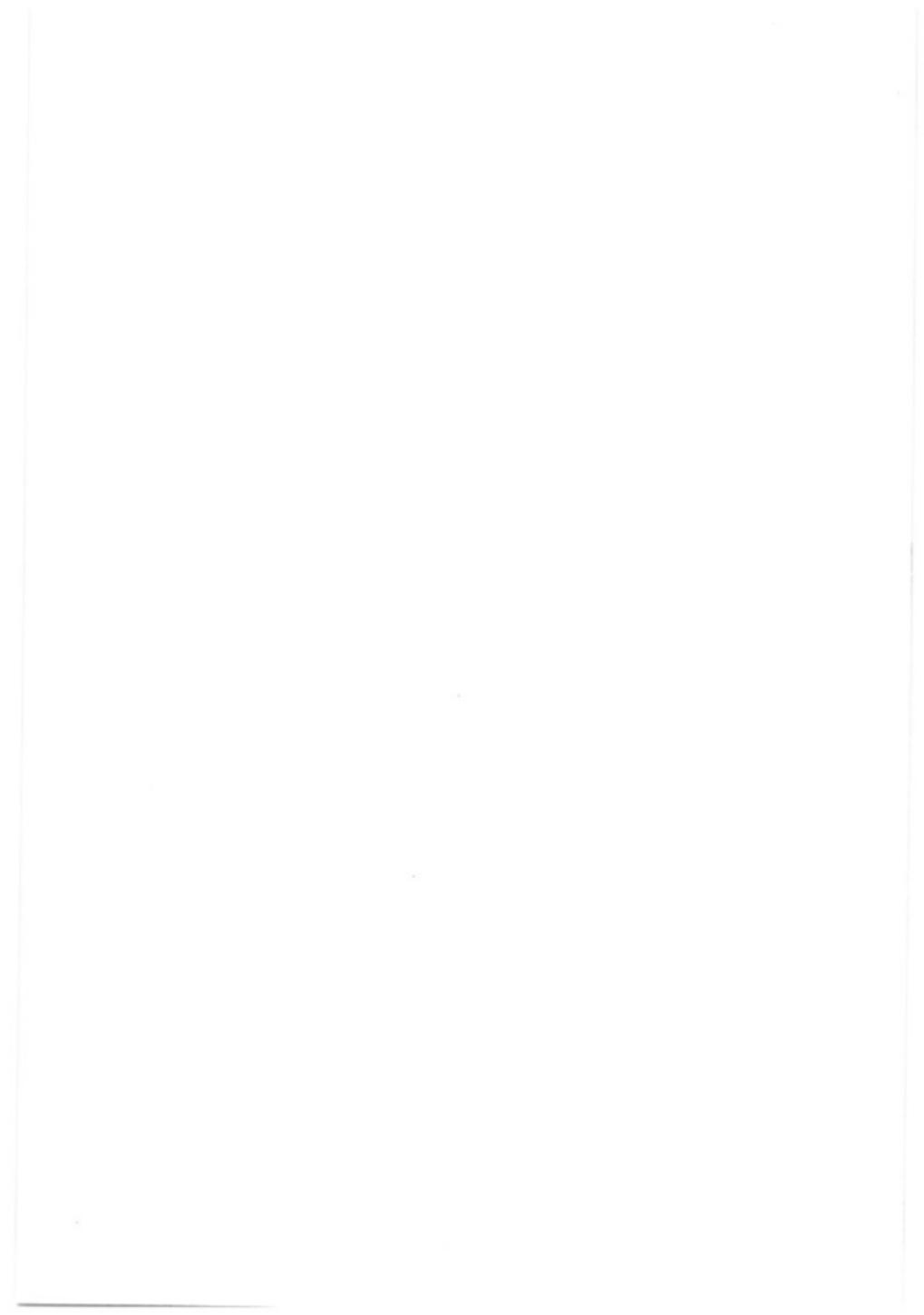
南台遺跡の調査

谷地寺遺跡の調査

他

2007年

長井市教育委員会



市内遺跡発掘調査報告書(15)

堀切遺跡の調査

南台遺跡の調査

谷地寺遺跡の調査

他

平成19年3月

長井市教育委員会

序

市内遺跡発掘調査も今年度で15年が経過しました。当初のころは埋蔵文化財の関心もうすく、土木工事の妨げという考え方一部にあったと聞きおよんでおります。しかし、開発工事が押し寄せるなか、諸先生方の文化財保護に対する熱意と調査の大切さが次第に地域の方に伝わりはじめ、発掘調査を行うにあたり地元の方々から力強い協力体制を組織いただくなど、埋蔵文化財もしだいに市民権を得てきたものと確信しているところです。

発掘調査の起因となる開発事業の種類をみると、民間開発によるものが大多数をしめているようです。全国的にも公共工事が減少傾向にあるなか、長井市でも市単独の土木工事は減少しておりますが、集合住宅や大型店舗の造成工事など民間が事業主体となる建設事業が計画されています。しかし、民間開発が起因となる試掘調査が毎年継続して行われていることは、取りも直さず15年間継続してまいりました本事業の趣旨が広く浸透し、ご理解をいただいているものと確信しているところです。

開発事業と埋蔵文化財保護の係わりは常に背中合わせで、両者の間には困難な問題も残されておりますが、地域の環境づくりや生活文化の向上を目指すためにも、開発と遺跡保護の調整が同じ目線で行われるよう、努めてまいる所存であります。

最後になりましたが、本調査にご協力いただきました方々、また、厳しい天候にもかかわらず発掘調査に参加くださいました皆様には、心より感謝申し上げます。

平成19年3月

長井市教育委員会

教育長 大滝昌利

例　　言

1. 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した、平成18年度の開発事業における調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 事業期間は平成18年4月1日から平成19年3月31日までである。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）
調査参加者 牛谷 清、梅津 正、遠藤誠一、勝見忠一、金子津代志、上村欣三郎、齋藤勝雄、
　　渋谷紀一、高橋信夫、原 幸造、平間 正、渡部健次
事務局 事務局長 那須宗一（長井市教育委員会 文化生涯学習課 謀長）
　　事務局主幹 村上和雄（長井市教育委員会 文化生涯学習課 文化主幹）
　　事務局長補佐 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）
　　事務局員 安部貴美子（長井市教育委員会 文化生涯学習課 主事）
資料整理 白井二男（長井市教育委員会 文化生涯学習課）
　　安達律子（長井市教育委員会 文化生涯学習課）

4. 本調査を実施するにあたり、次の方々にご協力をいただいた。ここに記して感謝を申し上げます。

（順不同、敬称略）

山形県教育庁教育やまとた振興課文化財保護室、朝日金屬工業（株）、小笠原建設（株）、（株）エヌ・ティ・イ・ドコモ東北、（株）ヤマダ電機、台町地区、成田北東地区、四釜吉春、大場孝一郎、大場榮次、孫田善朗、長井市建設課

また、報告書を作成するにあたり次の方々からご指導・ご助言を賜った

（順）山形県埋蔵文化財センター、尾形與典、山口博之、伊藤邦弘、小林圭一、菅原哲文、阿部明彦

5. 遺物の縮尺は土器実測図・拓影図1／3、打製石器実測図1／2、凹石1／3とし、挿図・付図はそれぞれスケールで示した。

6. 本書の編集および執筆は岩崎義信が担当し、拓本、挿図、図版の作成は白井二男、安達律子の協力を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1	第14図 御殿遺跡	22
1. 調査の目的	1	第15図 御殿遺跡出土器拓影図	23
2. 調査の方法	1	第16図 谷地寺遺跡概要図	26
3. 調査の経過	1	第17図 谷地寺遺跡トレンチ概要図	27
II 開発事業に係る調査	4	第18図 谷地寺遺跡土器拓影図 (1)	28
1. 北堂C遺跡	4	第19図 谷地寺遺跡土器拓影図 (2)・石器実測図	30
2. 九野本地区	5	第20図 谷地寺遺跡遺物実測図	31
3. 堀切遺跡	6	第21図 川原屋敷遺跡概要図	36
4. 南台遺跡	7		
5. 遠藤館	21	表1 調査工程表	2
III 遺跡台帳整備に係る調査	22	表2 埋蔵文化財ヒアリング一覧表	2
6. 御殿遺跡	22	表3 遺物観察表	16
7. 谷地寺遺跡	26	表4 土・石製品観察表	16
8. 川原屋敷遺跡	36		
報告書抄録	卷末		

表 目 次

表1 調査工程表	2
表2 埋蔵文化財ヒアリング一覧表	2
表3 遺物観察表	16
表4 土・石製品観察表	16

図版目次

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査個所位置図	3
第2図 北堂C遺跡概要図	4
第3図 九野本地区概要図	5
第4図 堀切遺跡概要図	6
第5図 南台遺跡調査概要図	8
第6図 遺構配置図	8
第7図 1号住居跡	9
第8図 1号住居跡出土遺物	10
第9図 2a・2b号住居跡	11
第10図 2a号住居跡出土遺物	11
第11図 2b号住居跡出土遺物	13
第12図 包含層出土遺物	14
第13図 遠藤館概要図	21

図1版 北堂C遺跡	4
図2版 九野本地区	5
図3版 堀切遺跡	6
図4版 南台遺跡 (1)	7
図5版 南台遺跡 (2)	17
図6版 南台遺跡 (3)	18
図7版 南台遺跡 (4)	19
図8版 南台遺跡 (5)	20
図9版 遠藤館	21
図10版 御殿遺跡 (1)	22
図11版 御殿遺跡 (2)	25
図12版 谷地寺遺跡 (1)	32
図13版 谷地寺遺跡 (2)	33
図14版 谷地寺遺跡 (3)	34
図15版 谷地寺遺跡 (4)	35
図16版 川原屋敷遺跡	37

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ現在まで216箇所の遺跡を把握しているが、近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業と、宅地造成をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はそのほとんどが表面踏査で確認したものである。そのため遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から一部試掘調査を実施し、記録として保存にあたり遺跡台帳の整備に努めた。

2. 調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施している。

(1) 現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合には現地踏査、聞き取り調査を行い遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が開発事業予定区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ恐れがあるときには坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳整備の目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲に坪掘りやトレンチ掘り、小規模な発掘調査を行い遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにし、遺跡台帳の補筆にあたる。

(3) 立会調査

開発事業において遺跡におよぼす影響が軽微な場合は、工事施工に立ち会って調査を行う。発見された遺構・遺物は記録保存を行う。

3. 調査の経過

長井市教育委員会では、これまで行ってきた分布調査をもとに遺跡地図を作成しており、この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画される各種開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを行い、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても隨時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ態勢を組織し、同様の調査を行った。

その結果、本年度は8遺跡の調査を実施した。内訳は民間開発に係る調査が4件、遺跡台帳整備に関する調査が3件で、公共事業に係わる調査の依頼は1件であった。民間開発が増えつつあるのが現状である。

なお、現地調査の工程と、ヒアリングに係る調査の内容は次のとおりである。

調査工程表

表1

内容 日程	平成18年										平成19年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
現地踏査									■				
試掘調査				■	■	■	■		■				
発掘調査						■							
報告書作成													

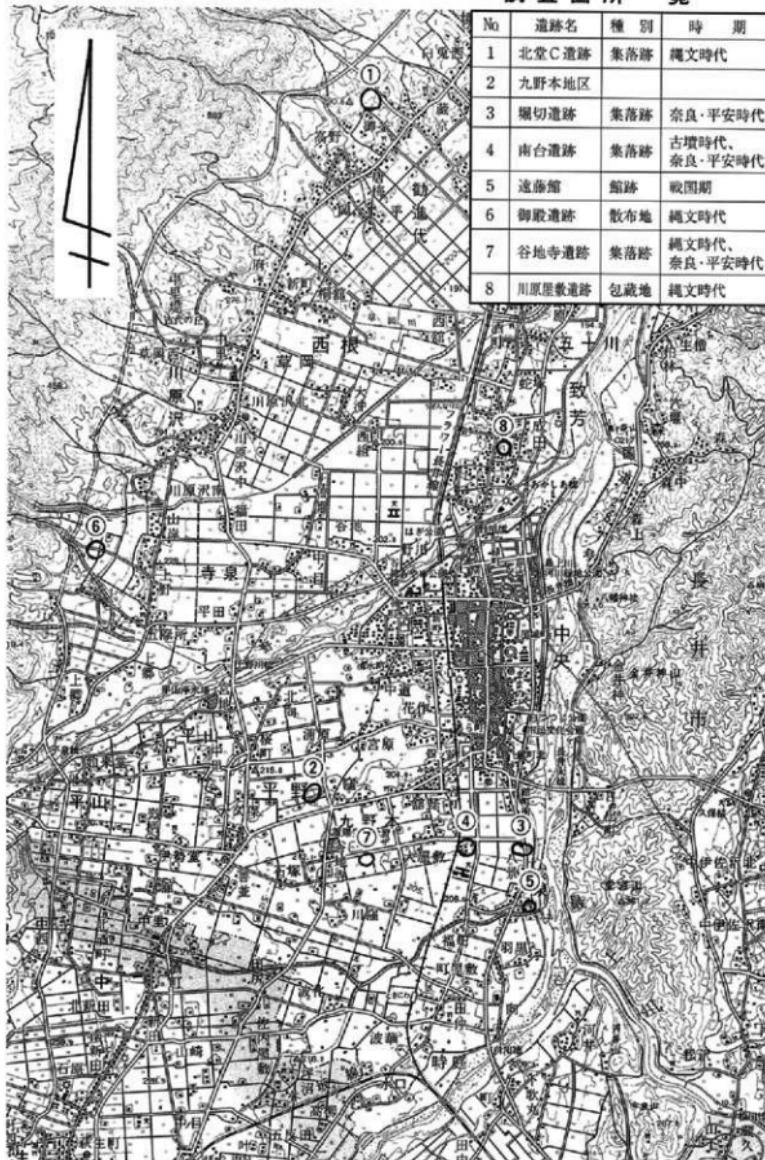
埋蔵文化財ヒアリング一覧

表2

事業種別	遺跡名	調査区分	種別	時期	備考
鉄塔建設事業に係る調査	北堂C遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代	民間開発
大規模造成事業に係る調査	九野本地区	試掘調査			民間開発
量販店舗造成事業に係る調査	堀切遺跡	試掘調査	集落跡	奈良・平安時代	民間開発
個人宅地造成事業に係る調査	南台遺跡	立会い調査	集落跡	古墳時代、奈良・平安時代	民間開発
道路改良事業に係る調査	達藤館	試掘調査	館跡	戦国期	公共事業
遺跡台帳整備に係る調査	御殿遺跡	現地踏査	散布地	縄文時代	新規発見
	谷地寺遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代、奈良・平安時代	
	川原屋敷遺跡	試掘調査	包蔵地	縄文時代	新規発見

調査箇所一覧

No	遺跡名	種別	時期
1	北堂C遺跡	集落跡	縄文時代
2	九野本地区		
3	堀切遺跡	集落跡	奈良・平安時代
4	南台遺跡	集落跡	古墳時代、奈良・平安時代
5	迷路館	船跡	戦国期
6	御殿遺跡	散布地	縄文時代
7	谷地寺遺跡	集落跡	縄文時代、奈良・平安時代
8	川原屋敷遺跡	包蔵地	縄文時代



第1図 調査箇所位置図

II 開発事業に係る調査

1. 北堂C遺跡

所在地 長井市勘進代地内

調査期間 平成18年9月11日

起因事業 鉄塔建設事業

遺跡環境 長井市街地の北西部、田沢川の河岸段丘上に位置し昭和57年の分布調査で発見された遺跡である。遺跡の中心は山ろくから南東に張出した台地中央部にあり、縄文時代早・前期の遺物が出土している。

当該区域はその先端部にあたることから試掘調査を実施した。

調査状況 開発予定区域に1×10mのトレーナーを任意に3箇所設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げ造機・遺物の検出にあたった。

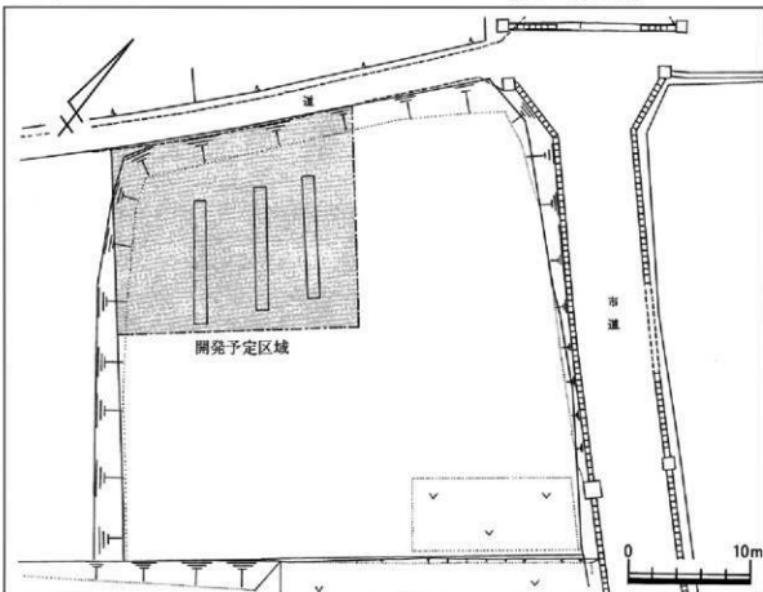
調査結果 一部トレーナーで地山層を掘り込んだ黒色土のプランを確認したが、遺物は検出されなかった。本工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないとと思われる。



遺跡近景（上） 1トレーナー（下）



図版1 北堂C遺跡



第2図 北堂C遺跡概要図

2. 九野本地区

所在地 長井市九野本地内

調査期間 平成18年7月20日

起因事業 大規模造成事業

遺跡環境 長井市街地西部の田園地帯に位置する。

開発予定区域に周知の遺跡はおよんでいないが開発面積が $10,000\text{m}^2$ を超えることから試掘調査を実施した。

当該地域は昭和40年代に造成された養鰐場跡で、現在も大小のコンクリート製の水槽が残っている。

調査状況 開発予定区域に $1.4 \times 10\text{m}$ のトレンチを任意に5箇所設定し重機を用いて地山層まで堀下げ造構・遺物の検出にあたった。

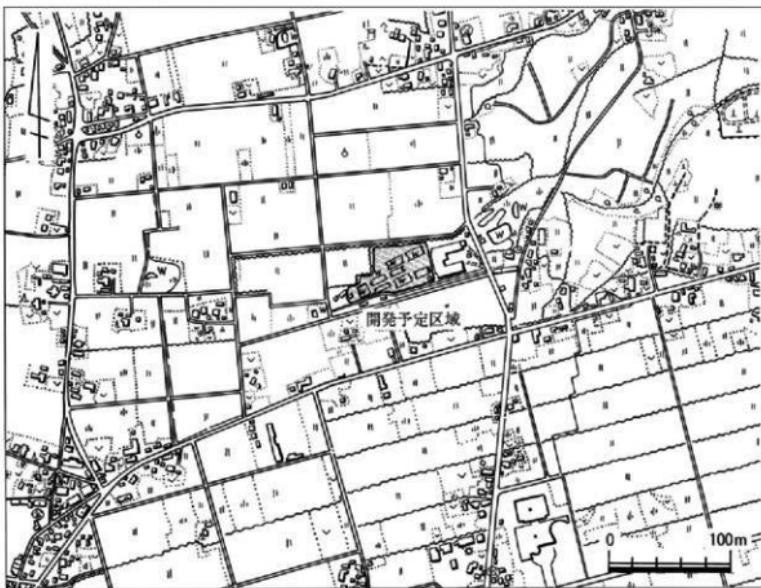
調査結果 各トレンチとも砂礫層に覆われ、地山層まで70~80cm の深さがあり湧水が認められる。4トレンチで黒色の円形プランを2基検出したが遺物は検出されなかった。これらのことから当該区域に遺跡はおよんでいないものと思われる。



調査区近景（上）



1トレンチ（下）



第3図 九野本地区概要図

3. 堀切遺跡

所在地 長井市館町南地内

調査期間 平成18年10月4・5日

起因事業 量販店舗造成事業

遺跡環境 長井市街地の南部、最上川によって形成された河岸段丘上に位置する。本遺跡は平成13年に緊急掘削調査が行われ堅穴住居跡3棟のほか土坑や柱穴が検出され、平安時代の集落跡として周知されている。

当該区域はその東側にあたることから試掘調査を実施した。

調査状況 開発予定区域に1×15mのトレンチを20m間隔に11箇所設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げ構造・遺物の検出にあたった。

調査結果 3トレンチで土師器が数点出土したが、他のトレンチと同様に遺構は検出されなかった。各トレンチとも地山層まで80~90cmと深く疊層が介在し明確な遺物包含層は確認されなかった。した

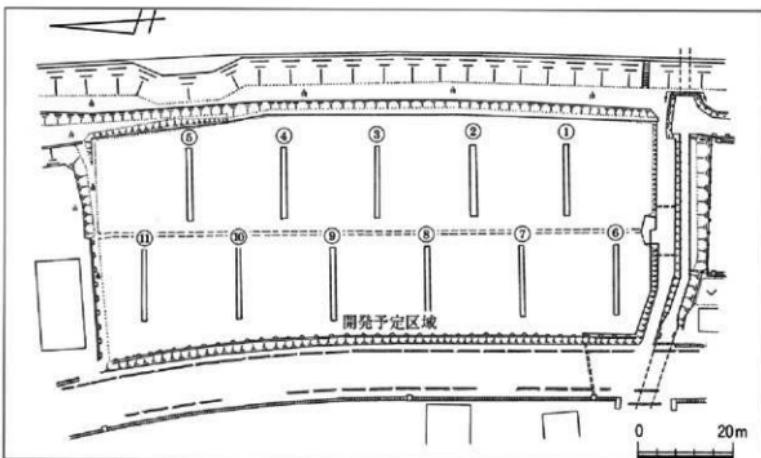
がって遺跡の中心地は標高の高い国道の西側と推測され、当該地域は遺跡の東端部と考えられ、本工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないとと思われる。また、本遺跡の西側には古墳時代の南台遺跡、平安時代の小山遺跡、绳文時代の谷地寺遺跡と東西軸に沿って遺跡が点在している。そこには旧河川で形成された自然堤防の存在が予想され、これらの遺跡は東西方向に伸びる高台に営まれたものと推測される。



遺跡近景（上） 出土遺物（下）



図版3 堀切遺跡



第4図 堀切遺跡概要図

4. 南台遺跡

所在地 長井市台町地内

調査期間 平成18年8月7日、9月25日・26日

起因事業 個人宅地造成

遺跡環境 長井市街地南部の最上川によって形成された河岸段丘上に位置する。一帯は地名が示すように北西から南東にかけて高台の張出しが見られ、当該調査区域は山形鉄道フラー長井線東側の住宅地にあり段丘の南東部にあたる。遺跡発見の発端は昭和30年代に出土した須恵器の発見にはじまる。出土地点は長井線の東側と伝えられ、詳細は不明であるが須恵器は重ね焼き状態にあり窯跡の存在が予想されていた。また、平成12年に本遺跡の北西部において緊急発掘調査が行われ、掘立柱建物跡や耕作痕、溝跡など江戸初期の集落跡が検出され、広範囲に複数時期の遺跡が存在するものと推測される。

調査状況 開発予定区域に試掘調査を行ったところ、南側で貯水槽造成による擾乱が確認されたほか大小の擾乱が見られたものの、一部で土師器の一括資料や造構プランが検出されたため、開発者と協議を行い立会い調査を実施した。

調査の結果 限られた調査面積であったが竪穴住居跡3棟をはじめ多くの土師器が出土したため、図面と写真による記録保存を行い遺跡の保護にあたった。包含層に達するまで30~40cmと比較的浅い土層堆積であり、耕作やゴミ穴による擾乱が随所で見られる。1号住居跡は表土直下の2層上位で確認された造構で、地山層まで掘り込まれている。出土遺物の量は少ないが完形品が多く出土層位において覆土上位と住居跡床面に大きく分けることができる。2・3号住居跡は調査区北側で検出された。造構の重複関係が認められ、土層断面の観察から2棟の住居跡の重複と判断した。遺物は2号住居跡の覆土から多く出土したが、造構の切り合い関係と遺物の新旧関係はかならずしも一致していない。詳細は次項で述べることとする。



遺跡近景（北から）



遺跡近景（南東から）

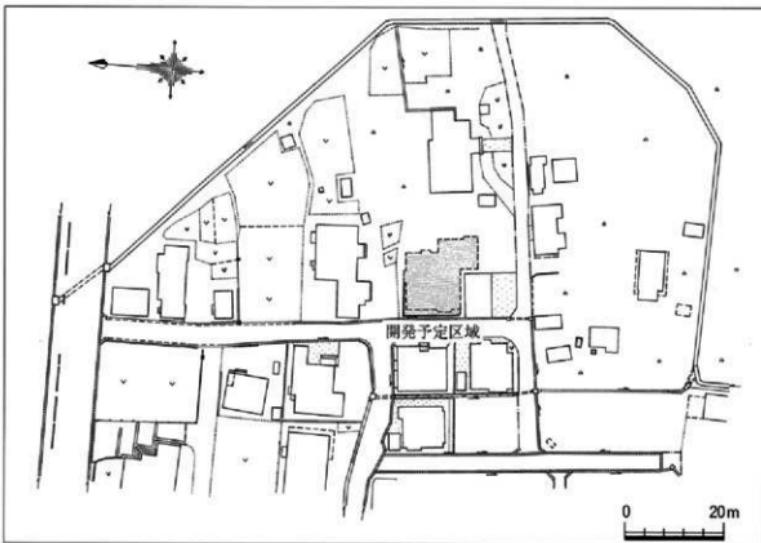


1 トレンチ

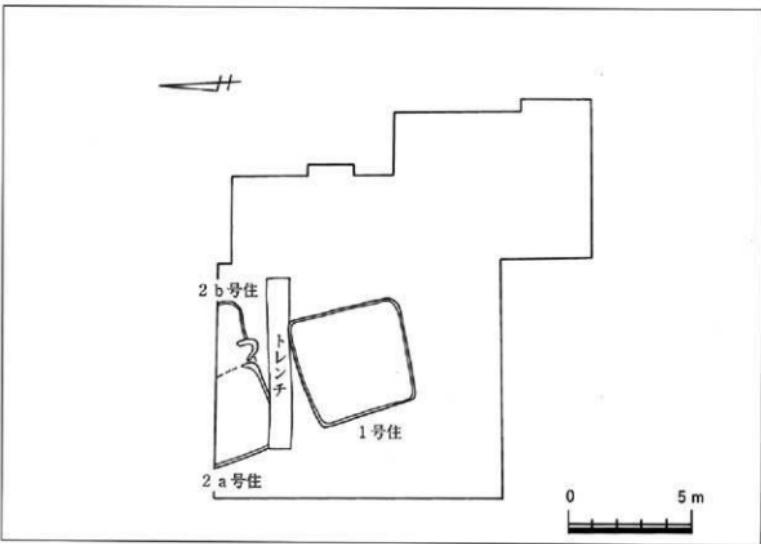


調査風景

図版4 南台遺跡（1）



第5図 南台遺跡調査概要図



第6図 造構配置図

1号住居跡（第7・8図、図版5・6）

遺存状況 包含層までの深さが比較的浅いため耕作による擾乱を受けたものと思われ、検出された覆土の堆積は浅いが遺存状況は比較的良好である。

平面形 方形を呈する。

規模 東西4.4m、南北4.7mを測る。

壁 開きぎみに立ち上がる。

床面 褐色地山層を掘り込み、ほぼ平坦面を呈する。

柱穴 検出されなかった。

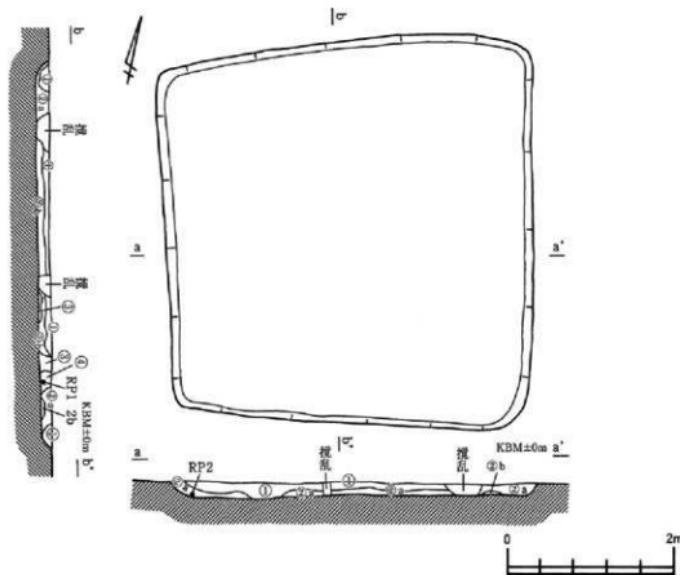
カマド 検出されなかった。

覆土 ①層：暗褐色土 黒褐色土をブロック状に含みしまり弱い土質で、炭化粒子を多く含む。②a層

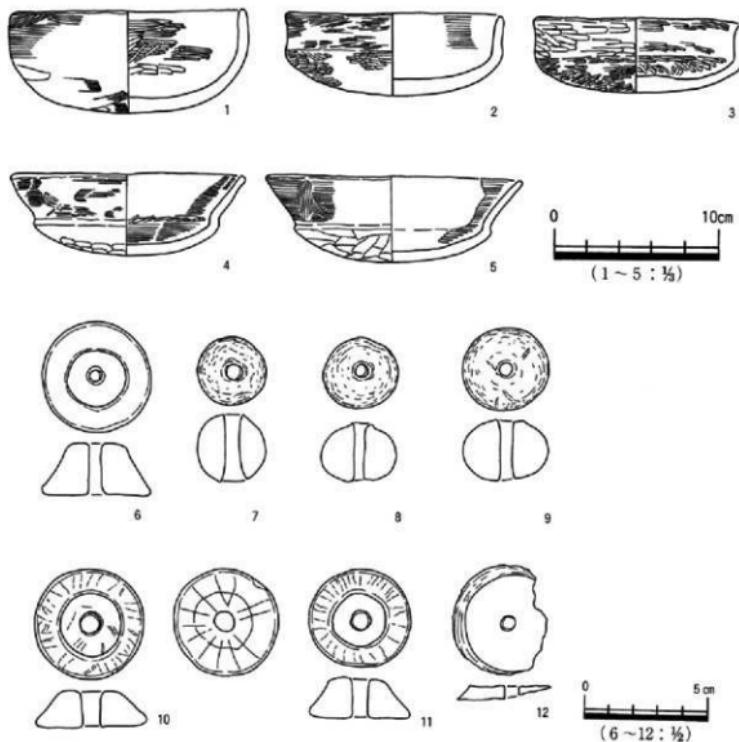
灰褐色土 褐色土をブロック状に含みしまりある土質で、炭化粒子を若干含む。②b層 灰褐色土 粘質土でしまりある土質。③層 明褐色土 粘性を帯び、しまりありかたい土質。④層 暗灰褐色土 粘質土で、しまりありかたい土質。

出土遺物 坏が5点、土製品4点（紡錘車1点、土錘3点）、石製品（紡錘車3点）が出土した。3は床面直上から出土し、他は覆土中位から下位にかけて出土した。坏は体部に稜が付くものと付かないものに大別され、4・5は内面が黒色された土器である。紡錘車は土製・石製があり6は土製、10~12は石製である。7から9は土錘である。なお、遺物の詳細は次項で述べることとする。

時期 出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。



第7図 1号住居跡



第8図 1号住居跡出土遺物

2 a号住居跡 (第9・10図、図版6・7)

遺存状況 包含層までの深さが比較的浅いため、耕作やゴミ穴による搅乱が認められる。試掘で南西隅が搅乱を受けている。

重複関係 2 b号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

平面形 ほぼ方形を呈するものと推測される。

規模 東西3.5m、南北の大きさは調査区外にあたるため不明。

壁 開きぎみに立ち上がる。

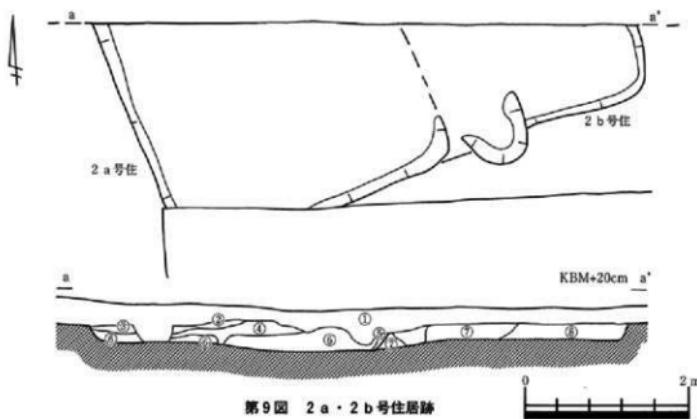
床面 褐色地山層を掘り込み、凹凸が認められる。

柱穴 このたびの調査では検出されなかった。

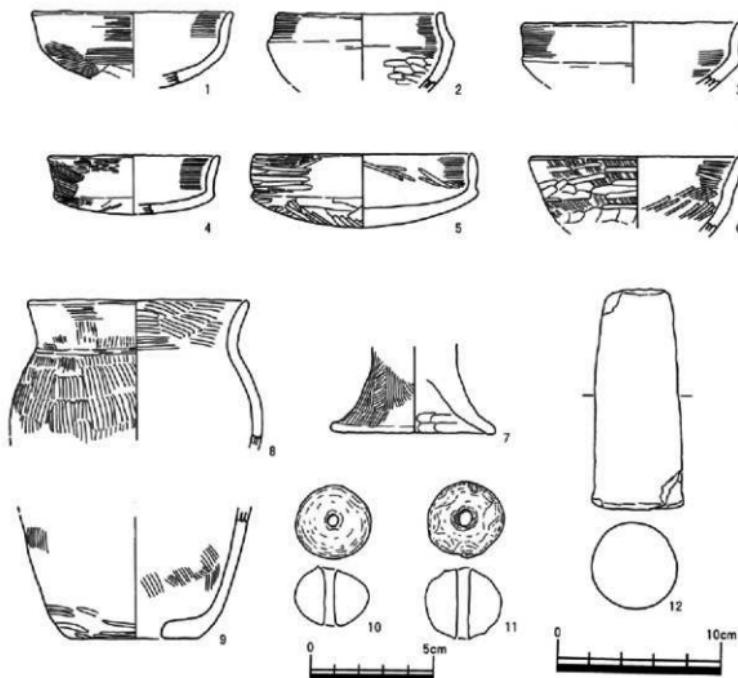
カマド このたびの調査では検出されなかった。

覆土 ①層 耕作土 ②層 暗褐色土 褐色粒子を若干含む。③層 灰褐色土 砂質でしまりある土質。

④層 黒褐色土 粒子が細かく⑤層 褐色土 粘性でしまりありかたい土質。本住居跡の壁と推測される。



第9図 2a・2b号住居跡



第10図 2a号住居跡出土遺物

⑥層 黒褐色土 棕色粘質土をブロック状に含みしまりありかたい土質。

出土遺物 多くの遺物が出土したが復元可能な資料について、坏6点、高坏1点、壺1点、瓶1点、土製品3点（支脚1点、土錐2点）を図示した。いずれの遺物も覆土から出土したものである。坏は口辺形態に特徴が認められ、外反、内湾、垂直に大別され、5・6は器内面が黒色処理された土器である。高坏は坏部を欠損し、脚部は短めで「八」字型に聞く。壺は小型で体部が球形を呈する。瓶は単孔で比較的小型の形状である。支脚は断面がほぼ円形を呈する。覆土下位から出土したが焼土や炭化物が未検出であり、埋没したものであろうか。他に土錐2点が出土している。

時期 出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。

2 b号住居跡（第9・11図、図版7・8）

遺存状況 包含層までの深さが比較的浅いため、耕作やゴミ穴による擾乱が認められる。

重複関係 2a号住居跡と重複し、本住居跡が古い。

平面形 ほぼ方形を呈するものと推測される。

規模 北側が調査区外にあたるため不明。

壁 開きぎみに立ち上がる。

床面 棕色地山層を掘り込み、ほぼ平坦面を呈する。

柱穴 このたびの調査では検出されなかった。

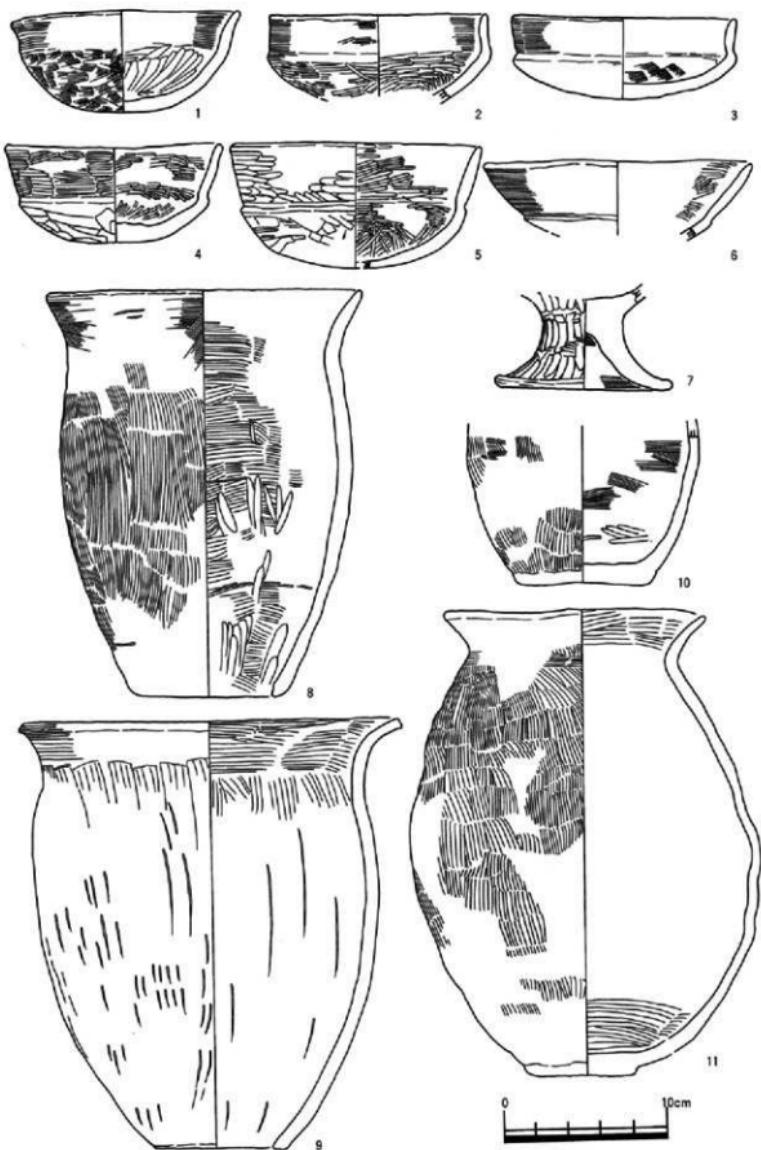
カマド 南側の壁沿いに浅い掘り込みをもつ焼土が検出された。煙道は未検出であるが、カマド跡の可能性がある。

覆土 ⑦層 黒褐色土 粘質土をブロック状に含みしまりのある土質。⑧層 茶褐色土 棕色土の小ブロックを含む土質。

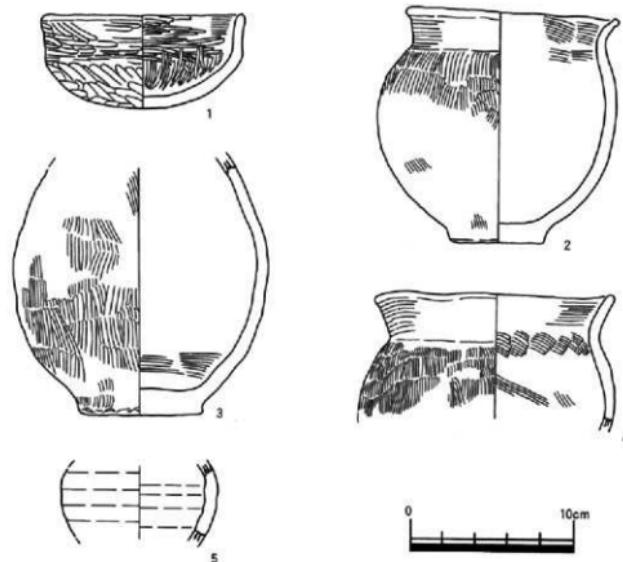
出土遺物 多くの遺物が出土したが復元可能な資料について、坏6点、高坏1点、瓶2点、壺2点を図示した。ほとんどの遺物は覆土から出土したものであるが、1の坏は南壁に密着した状態で、7の瓶は焼土の上に張り付いた状態でそれぞれ出土した。また、10の瓶は4の坏に覆いかぶさる状態で検出され、セット関係として捉えることができる。

坏は体部に縫が付くものと付かないものに大別され、さらに前者は2a号住居跡出土遺物同様、口辺形態において外反、垂直の種別があり、5・6は器内面が黒色処理される坏である。また、6は器全体が赤褐色を呈しており、胎土に赤色物を混入し焼成された可能性がある。7は高坏の脚部で、黒色処理された坏底部分を残し体部が欠損するが、内側が深く入り込み縫部が若干反りぎみに聞く。瓶は無底で頸部がしまり、口縁が外反する器形である。壺は体部下位に最大径をもち下膨れの形状を呈し、断面に凹凸が認められ調整の粗い土器である。

時期 出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。



第11図 2b号住居跡出土遺物



第12図 包含層出土遺物

遺物について

このたびの調査で出土した遺物は整理箱にして4箱を数え、内容は土器・土製品・石製品に分類され、本稿ではその概要を示すに留める。

1. 土器

土師器と須恵器があるが、土師器が圧倒的な割合をしめ須恵器は数点の出土であった。また、ほとんどが住居跡の覆土から検出されたものであるが、土器の分類から重複した遺構の新旧関係を把握するには至っていない。

(1) 土師器 (第8・10・11・12図、図版5~8)

壺、高壺、甌、壺、甌の器種に分類され、ここでは壺の細分を行う。

壺 口辺、体部、底部等器形の形態的特長から細分する。

1. 類 丸底で体部は緩やかに立ち上がり、垂直ぎみに立ち上がる頸部から外反りした口辺をもつ (第11図1、図版7~22)。
2. 類 丸底で口辺がほぼ垂直に立ち上がるもの (第8図1、図版5~1)。
3. 類 丸底で体部が内湾ぎみに立ち上がり、口辺がやや外傾するもの (第10図1、図版6~13)。
4. 類 丸底の体部から口辺が垂直ぎみに立ち上がり、頸部外面に棱線が形成されるもの (第8図2~3、第11図2~3、第12図1、図版5~2~3、7~23~24、8~36)。

- 5 類 A 4 類に類似するが、稜線の位置がより下位に付くもの（第10図3～5、図版6-15～17）。
- 6 類 体部は丸みを帯び、頸部が内湾し外面に稜線を形成し口辺が内湾ぎみに立ち上がるるもの（第10図2、図版6-14）。
- 7 類 丸底で頸部下位に稜線を形成し、口辺が開きぎみに立ち上がるもの（第11図4・5、図版7-25・26）。
- 8 類 底部を欠損するが、体部と頸部の境目にいくぶん括れ、口辺が開きぎみに立ち上がるもの（第10図6、図版6-18）。
- 9 類 丸底状の底部で、頸部が括れ段が形成され、口辺が外傾するもの（第8図4・5、第11図6、図版5-4、6-5、7-27）。

高坏（第10図7、第11図7、図版6・8）

いずれも坏部を欠損する。脚部の開きが少ないもの（第10図7）と大きいもの（第11図7）とがある。

瓶（第10図9、第11図8・9、図版6・7）

単孔のもの（第10図9）と、無底のものがある（第11図8・9）。後者は口辺が直線的に外傾するものと、曲線的に外傾するものに分類される。

壺（第10図8、第12図2・4、図版6・8）

小型で球形の体部をもち、口辺が外反りする。

甕（第11図10・11、第12図3、図版5～8）

体部下位に最大径をもつため、下膨れ状の形態となる。中型と小型の形状がある。

（2）須恵器（第12図5、図版8）

包含層から2点出土している。5は壺で、体部下位にはケズリによる調整痕がつく。

（3）土製品（第8図6～9、第10図10・11、図版6・8）

紡錘車（第8図6）の表面には漆の塗膜が認められ、その痕跡から付着した漆を拭き取ったものと推測される。土錐（第8図7～9、第10図10・11）は住居跡の覆土から出土している。球形の粘土塊に棒状工具で穿孔したもので、均一化した大きさに仕上げられている。支脚（第10図12）は2a号住居跡の覆土から出土した。筒状を呈し断面はほぼ円形を呈する。

（4）石製品（第8図10～12、図版6）

断面形が台形状を呈する。10の底面には、穿孔を中心に同心円と放射状の線刻が認められる。12は破損品と思われる。

以上、出土遺物について記載したが、土師器坏の細分から2～8類は住社式に、9類は栗園式にそれぞれ比定され、1類は両者に先行する形式として位置づけられる。

これらのことから、他の出土遺物も古墳時代後期の資料としてとらえることができよう。

表3 遺物観察表

()は現存値

排回 番号	図版 番号	器種	出土位置	法量(cm)			調査		底部 形態	分類	備考
				口径	底径	器高	外面	内面			
8-1	5	坏	1号住居跡	14.8	14.5	6.1	横ナデ ヘラケズリ	ミガキ	丸底	2類	
8-2	5	坏	1号住居跡	13.4	13.5	7.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底	4類	RP1
8-3	5	坏	1号住居跡	13.0	12.8	4.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底	4類	RP2
8-4	5	坏	1号住居跡	14.6	11.5	5.1	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ ヘラミガキ	丸底	9類	RP3 内面黒色處理
8-5	6	坏	1号住居跡	15.8	12.1	5.2	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ ヘラミガキ	丸底	9類	RP4 内面黒色處理
10-1	6	坏	2a号住居跡	12.5	11.5	(3.9)	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ ヘラミガキ	丸底	3類	
10-2	6	坏	2a号住居跡	10.4	11.5	(4.0)	横ナデ	ナデ		6類	
10-3	6	坏	2a号住居跡	13.4	13.3	(3.7)	横ナデ	ナデ		5類	
10-4	6	坏	2a号住居跡	10.6	10	3.7	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ ヘラケズリ		5類	
10-5	6	坏	2a号住居跡	13.8	14	4.6	横ナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	5類	内面黒色處理
10-6	6	坏	2a号住居跡	13.1		(4.3)	ハケメ ミガキ	ミガキ		8類	
10-7	6	坏	2a号住居跡			10.1	(5.8)	ハケメ	ナデ		
10-8	6	壺	2a号住居跡	13.4		(8.5)	ハケメ	ハケメ ナデ			
10-9	6	瓶	2a号住居跡			7.9	(7.5)	ナデ	ハケメ		
11-1	7	坏	2b号住居跡	14.2	12.9	6.3	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ ヘラミガキ	丸底	1類	RPS
11-2	7	坏	2b号住居跡	13.5	13.7	(4.9)	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ	丸底	4類	
11-3	7	坏	2b号住居跡	13.9	13.8	5.1	横ナデ ヘラケズリ	ヘラナデ	丸底	4類	
11-4	7	坏	2b号住居跡	13.5	11.8	4.9	横ナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	7類	RP6 内面黒色處理
11-5	7	坏	2b号住居跡	15.5	15.9	7.6	横ナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	7類	
11-6	7	坏	2b号住居跡	16.5	11.5	4.5	横ナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	9類	RP6 内面黒色處理
11-7	7	坏	2b号住居跡			10.9	5.5	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラナデ		
11-8	7	瓶	2b号住居跡	19.4	8.5	24.9	横ナデ ハケメ	ハケメ			RP6
11-9	7	瓶	2b号住居跡	23.0	8.1	26.0	横ナデ ヘラケズリ	ハケメ			RP8
11-10	8	壺	2b号住居跡			7.9	(9.1)	横ナデ ハケメ	ハケメ		RP6
11-11	8	壺	2b号住居跡	16.0	6.7	28.4					
12-1	8	坏	包 含 罩	12.4	12.3	5.7	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底	4類	
12-2	8	壺	包 含 罩	13.0	5.7	14.0	横ナデ ヘラミガキ	ハケメ	平底		
12-3	8	壺	包 含 罩			7.6	(15.1)	ハケメ	ハケメ	平底	
12-4	8	壺	包 含 罩	14.6		(7.6)	横ナデ ハケメ	横ナデ ハケメ			

表4 土・石製品観察表

()は現存値

排回 番号	図版 番号	出土位置	種別	種類	法量(cm・g)			備考
					最大長	最大径	重量	
8-6	6	1号住居跡	石製品	筋錐車	2.1	4.5	34.9	
8-7	6	1号住居跡	土製品	土錐	2.8	2.8	17.8	
8-8	6	1号住居跡	土製品	土錐	2.4	3.1	19.6	
8-9	6	1号住居跡	土製品	土錐	2.4	3.5	23.4	
8-10	6	1号住居跡	石製品	筋錐車	1.5	4.5	42.6	
8-11	6	1号住居跡	石製品	筋錐車	1.7	4.2	35.0	
8-12	6	1号住居跡	石製品	筋錐車	0.6	(0.6)	12.8	
10-10	8	2a号住居跡	土製品	土錐	2.4	3.1	18.3	
10-11	8	2a号住居跡	土製品	土錐	2.8	3.1	23.0	
10-12	8	2a号住居跡	土製品	支脚	9.0	3.4	395.0	



1号住居跡



遺物出土状況



1



2



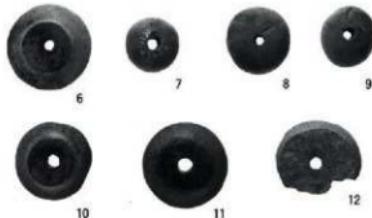
3
四版5 南台遺跡(2)



4



5



6

7

8

9



10



11



12



13



14



15



16



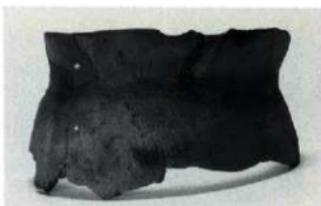
17



18



19



20



21

圖版 6 南台遺跡 (3)



2 a · 2 b 号住居跡



22



23



24



25



26



27



28

図版7 南台遺跡(4)



26



31



33



32



34



35



36



37



38



39



40

図版 8 南台遺跡 (5)

5. 遠藤館

所在地 長井市泉地内

調査期間 平成18年12月14日

起因事業 市道改良工事

遺跡環境 長井市街地の南東部、最上川と福田川によって形成された河岸段丘上に位置し平成3年の分布調査で発見された遺跡である。本遺跡は昭和40年代の土地改良で破壊を受けたが、調査区西南には土塁跡の高まりと堀跡の壅みが若干残っている。

調査状況 開発予定区域に $1 \times 10m$ のトレンチを任意に設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあつた。

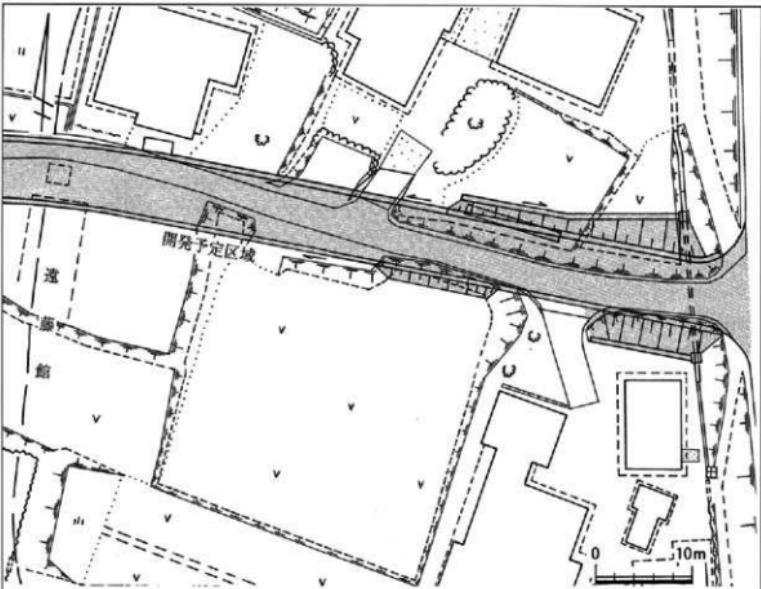
調査結果 表土層下 $30\sim40cm$ で地山層に達する。耕作による擾乱も見られたが、楕円形・円形の遺構プランと若干の陶磁器片が検出されたため、工事を実施するにあたり立会い調査が必要な旨、担当機関に報告した。



遺跡近景 (上) 土塁・堀跡 (下)



図版 9 遠藤館



第13図 遠藤館概要図

III 遺跡台帳整備に係る調査

6. 御殿遺跡

所在地 長井市寺泉地内

調査期間 平成19年12月15日

起因事業 道路台帳整備

遺跡環境 長井市街地の北西部、寺泉地区に位置する。一帯は田園地帯が広がり昭和40年代に大規模な基盤整備事業が行われた地域である。伝え聞くところによると工事現場のあちらこちらで土器や石器の出土が聞かれたという。現在は区画された水田地帯の西側に広域農道が通り簡易温泉施設も整備されている。

調査状況 本資料は地元の孫田善朗氏から提供いただいたもので、聞き取りによると子どもの頃に工事現場近くを通ったところ多くの土器や石器が散乱していたため、友人達とひろい集め今まで自宅に保管した資料であるという。その情報をもとに現地踏査を行った。

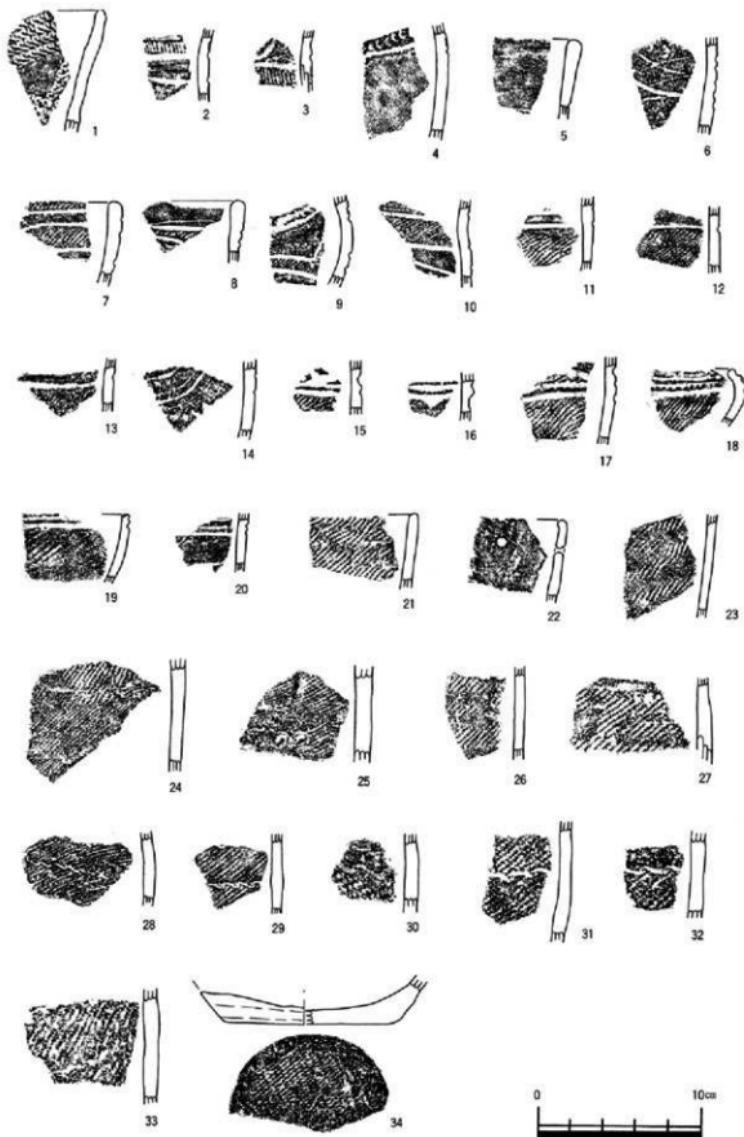
調査の結果 現地踏査を行ったが遺物は採集されなかったが新規発見の遺跡として登録した。



図版 10 御殿遺跡(1)



第14図 御殿遺跡



第15図 御殿遺跡土器拓影図

遺物について

いずれも表面採集で得られた資料で、整理箱で約1箱弱の量である。縄文土器のなかに剥片や碎片、石核も含まれているが、ここでは文様が識別できる土器を掲載し、時期ごとに分類を行いその内容を記載することとする。

第1群土器（第15図1、図版11）

1は胎土に纖維を含む口縁部破片で、口縁の形状から四つの小波状口縁をもつ深鉢と推測される。3～4条のループ文を横位・斜位に施し三角形の区画文様を創出し、表裏面とも丹念な調整が施され遺存状況の良好な土器である。

第2群土器（第15図2～14、図版11）

2～5は刻み目や刺突を加えた平行沈線で入組文が形成される土器で、2・3は箆状工具で、4は半截竹管で刻み目や刺突が施されている。6～14は平行沈線や縄文を充填した平行沈線で入組文が形成される土器である。2は口縁に突起状の装飾が施され、9は内湾した体部に刺突文と縄文充填の平行沈線が施文された土器である。

第3群土器（第15図15～17、図版11）

口頭部を沈線で区画し入組文状の三叉文が施される。

第4群土器（第15図18～20、図版11）

口頭部を沈線で区画し、羊齒縄文や点列が施される土器である。18は内湾した小型鉢の口縁部で口端部に刻み目が施され沈線の区画帯には刺突による点列をもつ。19・20は口頭部が沈線で区画され、19の口端には刻み目が施されている。

第5群土器（第15図21～34、図版11）

21・23～27は斜縄文が、28～33は綾縄文がそれぞれ施文された土器である。22は文無土器で、口縁に補修孔をもつ。34は網代痕が付いた土器底部である。

以上、土器文様の視点から詳細を記述したが、型式分類を行うと次のとおりである。

第1群土器は縄文時代前期前葉の大木1式土器に比定される。

第2群土器は縄文時代後期末の瘤付土器群に比定される。

第3群土器は縄文時代晩期の大洞BからBC式土器群に比定される。

第4群土器は縄文時代後期の大洞C1式土器に比定される。

第5群土器は第2群から第4群土器に伴う粗製土器である。

本市において上記土器群の類例を見ると、1群土器は三島遺跡で出土している。平成7年に試掘調査を行い、同群土器は包含層から出土したもので、四つの小波状口縁をもち口縁径が約45cmを測る大型の深鉢で、ループ文による三角形の区画が施される土器である。土坑から羽状縄文に刺突帶をもつ小型の鉢2個も出土し縄文前期前葉の遺跡と考えられる。2～4群土器は中里遺跡で出土している。平成14年に確認調査を行なったところ密集した土坑群が検出され、本遺跡と同様後期末から晩期中葉にかけての土器が出土している。

提供いただいた土器の分析から縄文前期と後期の遺跡が線で結ばれ、貴重な発見となった。



図版 11 御殿遺跡(2)

7. 谷地寺遺跡

所在 地 長井市九野本地内

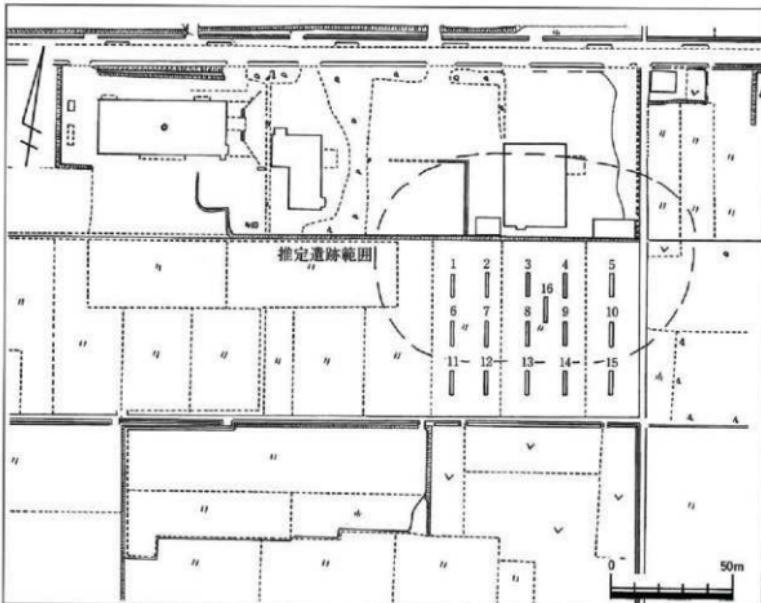
調査期間 平成18年12月5・6日

起因事業 遺跡台帳整備

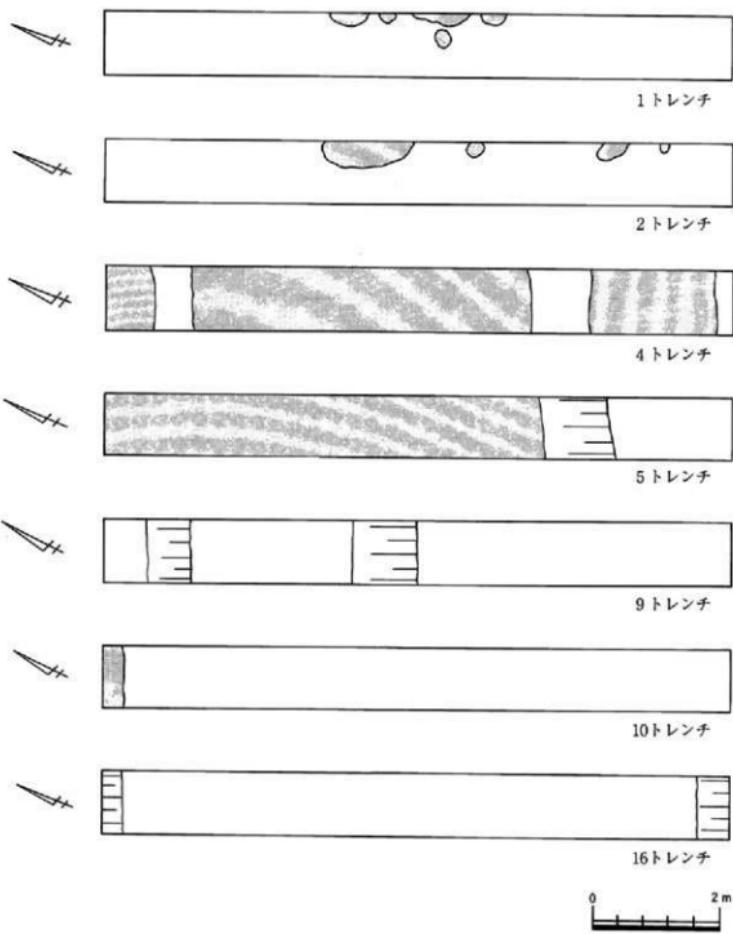
遺跡環境 長井市街地の南西部、九野本地区に位置する遺跡である。近隣には置賜生涯学習プラザをはじめ新たに進出した企業が建ちならんでいる。一帯は昭和40~50年代に行われた土地改良事業において土器や石器の出土が増えられ、登之越遺跡や谷地中遺跡といった縄文時代後・晩期の遺跡が周知されている。また、平成22年度から県営の基盤整備事業の計画もある。

調査状況 本遺跡は遺物散布の情報をもとに平成17年に試掘調査を行ったが、積雪で十分な調査ができなかったため、このたび再度、試掘調査を実施したものである。遺跡範囲に1×10mのトレンチを16箇所設定し、重機を用いて地山層まで掘下げ構築・遺物の検出にあつた。

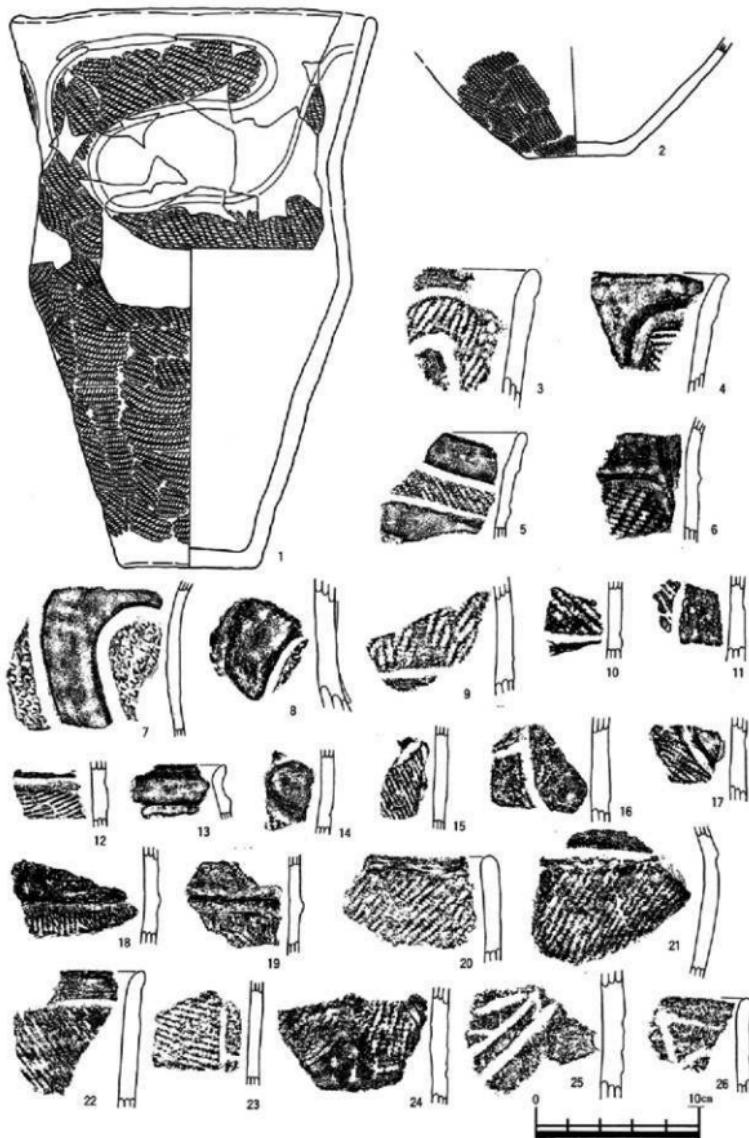
調査結果 調査区北と南では地山層に達するまで20~30cmと比較的浅い堆積土であるが、中央部にかけて60~100cmと深い。また、調査区全域において水位が高いため涌水が認められる。遺物の出土状況も時代別に大きく分かれる傾向にある。すなわち調査区中央部において北東から南西にかけて溝跡（旧河川跡）が検出され、須恵器片の多くが溝跡から検出された。反対に縄文時代の遺物は溝跡より北側のトレンチから検出された。溝跡は泥炭層の堆積土に覆われ木の実や自然木も出土し、木製品など有機質の遺物の存在も予想され情報量の多い遺跡として貴重な存在である。



第16図 谷地寺遺跡概要図



第17図 谷地寺遺跡トレンチ概要図



第18図 谷地寺遺跡土器拓影図(1)

遺物について

このたびの調査で出土した遺物は整理箱にして3箱を数え、内容は縄文土器・石器・須恵器に分類され、本稿では土器文様の特徴から分類を行うこととする。

1. 縄文土器

第1群土器（第18図1～24、図版12）

沈線および微隆起線による曲線文で文様を区画し、大木10式に比定される土器を本群とする。

1は胴中央部に膨らみをもち口縁にかけて内側に「く」字状に屈曲し、開きぎみに外反する口縁をもつ。胴部上位から口縁にかけて沈線による波頭文が施され、区画内は斜縄文が充填される。3・9・10・11・12・16は沈線で区画文が施された土器である。4～8・13～13～15・17は沈線と微隆起線による曲線で区画文が施された土器である。18・19・21～24は沈線および微隆起線で区画文が施された土器、2は土器底部、20は上記に伴う粗製土器である。

第2群土器（第18図25・26、第19図27～43、図版12～14）

複数の沈線で文様を区画し斜縄文が施文されるものと、集合沈線で文様が描出される土器で、縄文時代後期初頭に比定される土器を本群とする。

25～28・30・35・43は2条の沈線で区画文が、29・31～34・38～40は集合沈線で区画文が施された土器で、36・37・41・42は刺突をもつ土器である。

第3群土器（第19図46～58、図版12～14）

第1群土器および第2群土器と並行関係にあり、縄文中期末から後期初頭に位置づけられる土器である。

46・47・49・52・52～57は捺糸文が施文された土器で、53・56は施文具が交差し網目状を呈している。

48・50・51は斜縄文が施文された土器で、いずれも深鉢と推測される。58は土器品の可能性もある。

第4群土器（第19図44・45、図版14）

入組文をもつ土器で、縄文晚期初頭に位置づけられる土器である。

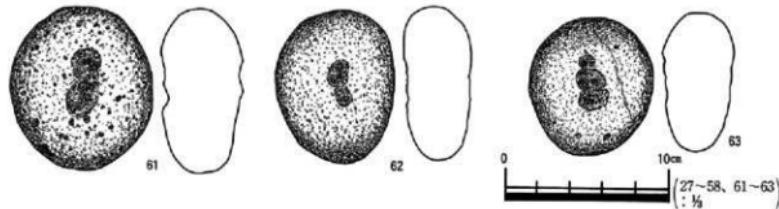
44は沈線と隆帯による入組文をもち、45は曲線による入組文が施される。

2. 石器

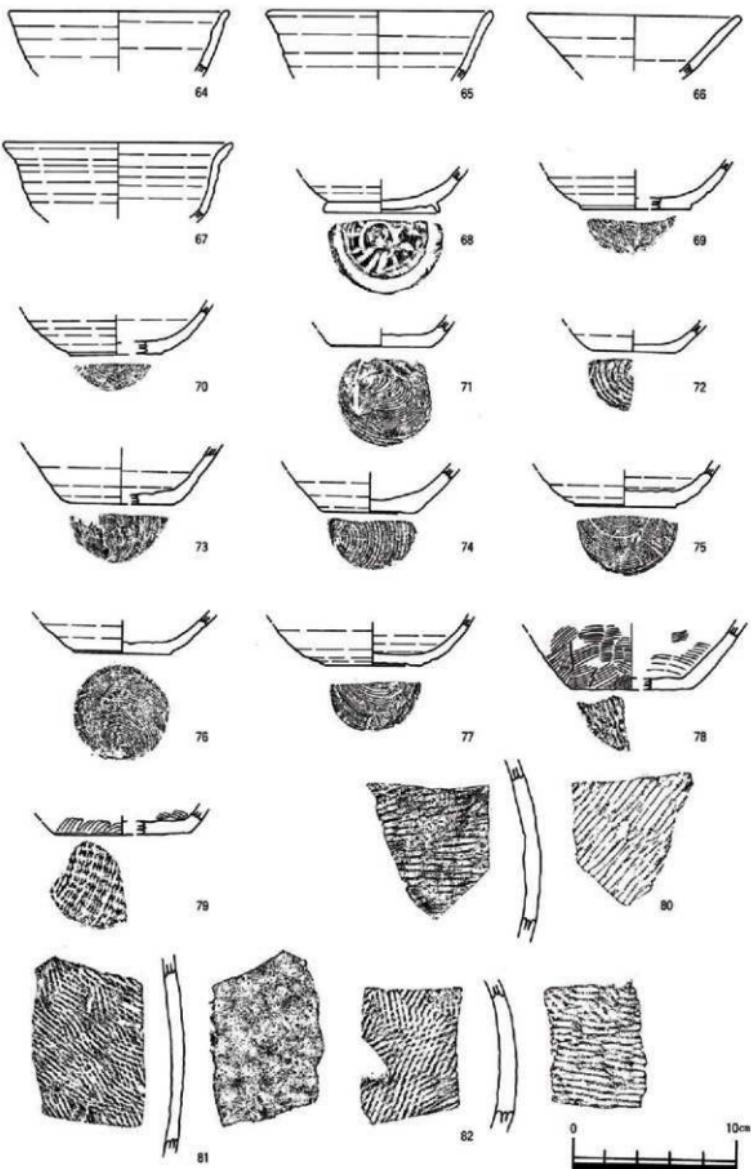
59は削器で、縱長剥片の先端部に加工を施した小型の石器である。石質は頁岩で長さ3.2cm。60は搔器で、厚手の横長剥片の先端に加工を施した石器で、石質は頁岩である。長さ5.4cm。61～63は凹石で、器中央部に複数の窪みをもつ。いずれも表面が擦れた痕跡があり磨石を転用したものと思われる。すべて石質は花崗岩である。

3. 須恵器他（第20図64～82、図版15）

64～67・69～77は須恵器の坏、68は高台坏である。64～66は口縁が開きぎみに立ち上がり、67は「く」字状に外反した口縁である。68は底部に指頭状の整形痕が残り墨書きが見られるが、文字は不明である。69～77は坏底部で、底径が小さく回転糸切による切離痕が残る。78は櫛齒状工具による調整痕をもつ壺であろうか。底部に織物痕が付く土器である。79は底面に織物痕が付く土器である。小破片であり器形は不明である。80～82は須恵器の壺で、内外面に叩痕が残る土器である。これらは9世紀後葉に比定される須恵器と土器である。



第19図 谷地寺遺跡土器拓影図(2)・石器実測図



第20図 各地寺遺跡遺物実測図



遺跡近景（南から）



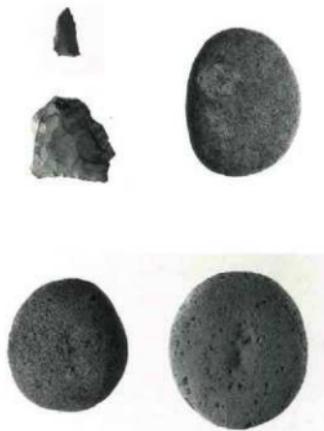
遺跡近景（東から）



3 トレンチ



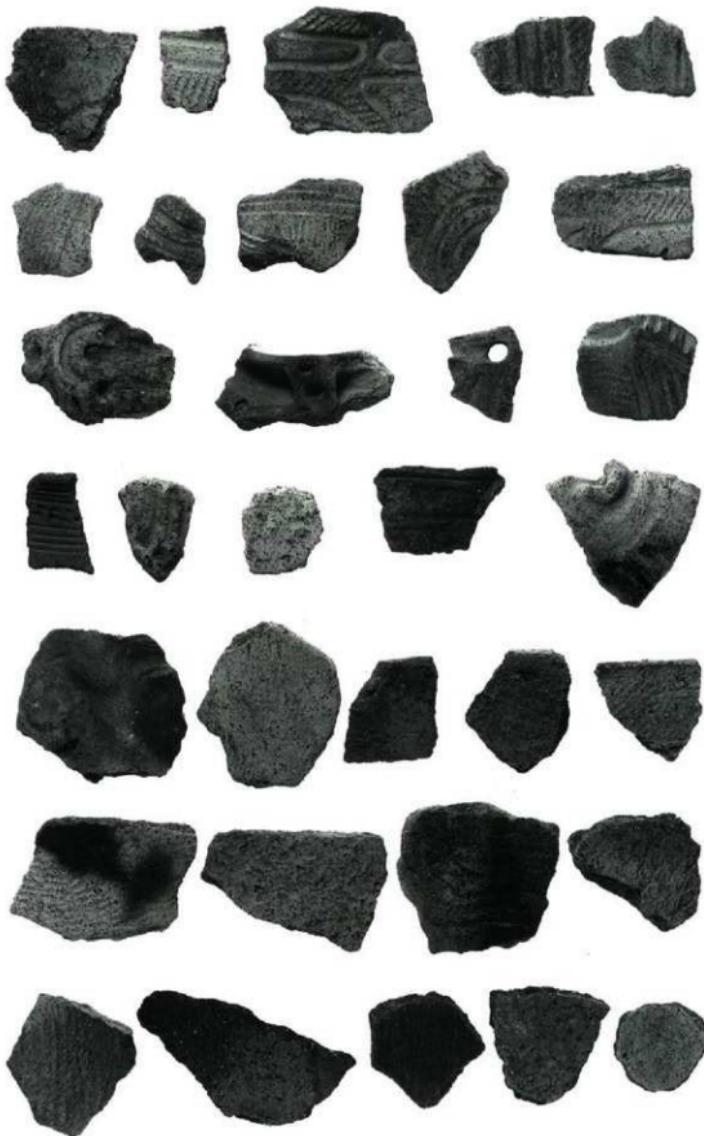
3 トレンチ土器検出状況



図版12 各寺遺跡（1）



圖版 13 各地寺遺跡（2）



図版 14 谷地寺遺跡 (3)



図版 15 谷地寺遺跡 (4)

8. 川原屋敷遺跡

所在地 長井市成田地内

調査期間 平成18年11月30日、12月1日

起因事業 遺跡台帳整備

遺跡環境 長井市街地の北東部、成田地区に位置する新規発見の遺跡で、一帯は最上川によって形成された河岸段丘面にある。遺跡周辺は畠地に囲まれた閑静な住宅街が広がり近年急速に宅地化が進んでいる地域でもある。遺跡東南側には八幡神社が奉られ、そこを南北に伸びる道路が旧道で現在の県道が整備される以前は旧成田村の中心地であったという。また、遺跡の南西側には旧佐々木家の屋敷があり、クリの大木が当時の繁栄振りをしのばせている。

調査状況 東西50m、南北50mの範囲を調査区域とし調査可能な場所に1×8mのトレンチを2箇所、1×5mのトレンチを6箇所それぞれ任意に設定し、手掘りで地山層まで掘下げ造構・遺物の検出にあたった。

調査の結果 4・6トレンチを除くと地山層までの深さが80~90cmと厚い土層堆積を示す。造構・遺物は7トレンチで直径約2.4mの造構プランを、8トレンチで幅約40cmの溝跡をそれぞれ検出し、2・3・7・8トレンチから石器や陶磁器片が数点出土した。また、本調査区は現況において平坦地となっているが、地形図の等高線は当該地を用るように表記され、周囲より1mほど低い窪地に描かれている。これらのことから、出土した石器や陶磁器は窪地が埋没する過程で流れ込んだもので、川原屋敷遺跡の中心は調査区域周囲の比較的標高の高い場所に営まれたものと推測され、出土遺物から縄文時代や戦国時代の遺跡の存在が予想される。



第21図 川原屋敷遺跡概要図



遺跡近景（南西から）



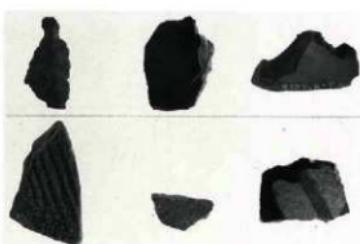
遺跡近景（北東から）



7 トレンチ



7 トレンチ 土層断面



出土遺物

図版 16 川原屋敷遺跡

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	堀切遺跡の調査、南台遺跡の調査、谷地寺遺跡の調査							
卷次	15							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	27集							
編著者	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	山形県長井市清水町一丁目25番1号 TEL 0238-84-7677							
発行年月日	2007年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
堀切	山形県長井市 館町南字堀切	6209		38度 05分 17秒	140度 02分 44秒	2006.10.04 ～ 2006.10.05	165m ²	量販店造成
南台	山形県長井市 台町	6209	11	38度 05分 27秒	140度 02分 10秒	2006.08.07 2006.09.25 2006.09.26	120m ²	個人宅地造成
谷地寺	山形県長井市 九野本字長野	6209		38度 05分 10秒	140度 01分 30秒	2006.12.05 ～ 2006.12.06	160m ²	遺跡台帳整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堀切	集落跡	奈良・平安		土師器				
南台	集落跡	古墳時代後期	住居跡	土師器、支脚、 紡錘車、土鍤				
谷地寺	集落跡	縄文中期・後期 平安時代		縄文土器、磨石、 須恵器				

**長井市埋蔵文化財調査報告書 第27集
市内遺跡発掘調査報告書(15)**

平成19年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市清水町1-25-1
TEL (0238) 84-7677

印刷 (株)芳文社 よねざわ印刷
山形県長井市十日町一丁目9番2-1号
TEL (0238) 84-2148
